

氏名	申 貞恩
学位の種類	博士（ 学術 ）
学位記番号	博 甲 第 8 4 4 3 号
学位授与年月日	平成 3 0 年 3 月 2 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本語の移動表現における二格名詞句の場所性に関する研究

主査	筑波大学 教授	Ph.D（言語学）	今井 新悟
副査	筑波大学 教授		加納 千恵子
副査	筑波大学 准教授		木戸 光子
副査	筑波大学 准教授	Ph.D（日本語学）	ブッシュネル ケード コンラン

論 文 の 要 旨

審査対象論文は、日本語の移動表現に関する問題について、心理実験的調査のデータに基づき、移動を表す動詞とその動詞が伴う二格名詞句の場所性に焦点を当てて論じたものである。移動表現はどの言語にも備わっている基本的かつ汎用的なものであり、移動表現についての探究は人間の空間認知の解明にも繋がる一方、個別言語による違いも認められるはずであるという認識に基づき、母語話者の容認度を測定し、データを分析して論じた研究である。日本語教育の観点からも、日本語の移動表現を産出するためには、日本語における名詞の場所性の特性を明確に理解する必要があるとしている。

本論文の構成は以下の通りである。

第 1 章 序論

第 2 章 先行研究

第 3 章 調査概要および分析方法

第 4 章 容認度評定調査による検証および分析結果

第 5 章 名詞の場所性と移動動詞との関係性

第 6 章 本論文のまとめと今後の課題

各章の概要は以下の通りである。

第 1 章では、研究の課題と論文の構成を示している。

第 2 章では、名詞の場所性に関する研究、名詞の空間化「～のところ」に関する先行研究について概観し、先行研究への疑問点を明らかにした。まず、場所性の有無が二分法で議論されていることが妥当であるか、次に、場所性を名詞の性質としているが、名詞と移動動詞との組み合わせによる動作性への影響はないものとしてよいかを疑問点とした。さらに、どういう条件によって場所性が変化するかとの議論も必要であると指摘し

ている。以上から本論文の研究課題として以下の3点を設定している。

[研究課題 1] 移動表現における名詞の場所性は、場所性のありなしの二通りであるか。

[研究課題 2] 移動表現における名詞の場所性には、結び付く移動動詞も影響するか

[研究課題 3] どのような特性を持つ名詞が「～のところ」と結び付きやすいか。

第3章では、先行研究におけるデータの収集法を網羅的に紹介した上で、本研究での実験調査法とその妥当性について論じている。また、調査対象語の選定基準など本研究の調査概要とデータの分析方法について報告している。具体的には、本研究においては、心理的実験調査は提示文の条件がコントロールできる作例を提示し、その文に対してどの程度容認可能であるかを評定してもらう容認度評定調査法を用いている。名詞54個と移動動詞13個を選定し、それらと3種類の移動構文の組み合わせを調査に用いた。さらに、名詞で表される物（または場所）の大きさという条件をコントロールするために、イラストによって描き分けた調査用紙を用いた。協力者からの容認度の回答を集計して、各項目の容認度を求めている。

第4章では、移動表現における名詞の場所性は、空間的な広がりがあり、静的な場合に高くなり、移動可能な物的（道具的）名詞で場所性が低くなることを指摘し、さらに場所性は連続的であると指摘している。また、名詞の場所性は結び付く動詞によって変化するという結果を示した。加えて、「～のところ」との結合に注目した考察からは、名詞と移動動詞が直接結び付く構文（直接移動構文と呼ぶ）と名詞に「～のところ」が結合した上で移動動詞と結びつく構文（間接移動構文と呼ぶ）を比較した結果、直接移動構文の方が間接移動構文よりも移動動詞の影響を受ける名詞の場所性（の被験者による容認度）の変化量が大きいことを示している。

第5章では、前章の結果に基づき、名詞の場所性に影響を与える要因、動詞の特性、構文の特性について考察している。名詞の場所性に影響を与える要因は「経路性」「具体性」「大きさ」であると主張している。動詞の特性については、「着点移動」動詞が「目標点移動」動詞より「行き先となる名詞の場所性との関係が強い」と主張している。また、移動の意味以外の含意が強くない動詞（「行く」「来る」「着く」など）では、名詞の場所性の強弱が移動動詞との共起可能性に直接的に影響して、容認性を決定づけるのに対して、移動の意味以外の含意（本論文では、「付加的な条件を求める動詞」と称している）がある動詞（「入る」「上がる」など）では、名詞の場所性の強弱が移動動詞との共起可能性をそのまま決定づけるのではなく、容認度判断の実験データから、その容認性が揺れることを論じた。もともと場所名詞であるものにさらに「～ところ」が付く現象である二重場所化と、逆に非場所名詞にもかかわらず「～ところ」を付加せずに場所名詞のように扱って移動動詞と共起する現象である空間化省略についても、移動の意味以外を含意しない動詞と付加的な意味を含意する動詞によってその振る舞い方が異なることを論じている。

第6章では、本研究のまとめと残された課題について述べている。

審査の要旨

1 批評

本論文は、人間の認知能力の一つである空間認知の解明への糸口として、言語事象としての移動動詞およびそれと共起する名詞の「場所性」に注目し、場所と移動の認知がどのように日本語に反映されているかを探る意欲的な研究である。先行研究において、古典的カテゴリー的発想により、名詞の場所性があるかによって二分されて議論されて来たことに疑問を呈し、認知言語学におけるカテゴリーの階層性・連続性の観点から、従前の明示的な規則に寄らず、これまでの研究には見られない心理実験的な大掛かりな調査と緻密な記述に基づいた重厚な議論を展開している。

対象となる言語事象が、上記の通り、二分法的に論じられるものでないことから、母語話者の容認度を詳細

に測るために、各種の条件をコントロールした緻密な調査計画を立て、結果の信頼性を確保するために、相当数の協力者を対象とした心理実験的調査を実施した。そこから、容認度を計算する方法を考案し、量的な分析を可能とし、考察に説得力を持たせている点は本研究の特徴であり、高く評価できる。この調査と分析の結果、名詞+移動動詞の容認度を決定する要因が「経路性」「具体性」「大きさ」の3点であること、そして名詞の場所性には段階性・連続性があることを明らかにした。このとき、相対的な大きさが問題になるが、それについては、観察者=話者の視点から、話者との比較による相対性に固定して調査していることが論を拡散させずに明確な結論を導くことに貢献している。その結果、認知言語学で言うところの身体性に基づく、腑に落ちる説明を可能にしている。

さらに、移動動詞が、純粹に移動を表す動詞か、あるいは移動以外の意味を表す動詞かに注目し、前者であれば、共起する名詞の場所性によってのみ「名詞+移動動詞」の組み合わせの容認度が決定され、母語話者の容認性判断が安定しているのに対し、後者であれば、「名詞+移動動詞」の容認度が不安定になり、母語話者間で判断が揺れるということを容認度という量的データで示した。上述のような綿密かつ効果的な実験調査を行ったことにより、このような微妙な違いを明らかにし得た。この結果は、場所性に関する容認度に上述の「経路性」「具体性」「大きさ」の3点に加え、句全体としての場所性・空間認知の判断も関わっていることを示唆している。人間の場所認知・空間認知の一端に言語事象から切り込んだ成果である。

以上のように十分な成果を挙げている論文ではあるが、課題も残る。まず、対象とした名詞は54個であるが、他にも対象とし得る名詞は多数ある。もちろん、そのすべてについて、本論文で行った調査を行うことは不可能であり、それを要求するものではないが、他の名詞でも今回の結果と同様になるというのは見込みであり、それが保証されているわけではない。今度、どのようにこの点に対応するべきかは残された課題の一つと言えよう。なお、対象とした移動動詞は13個であり、一見少なそうであるが、その選定理由で明らかにしているように、日本語の移動動詞のうち、ある程度の頻度がある基本的なものは網羅している点で十分な数と言える。

また、移動以外の意味をも表す動詞について、本論文では、名詞に対して「付加的条件を求める動詞」としているが、その定義が十分でない。例として「入る」は着点となる場所が中あるいは内であるという条件を求め、「帰る」はhome positionという特性を求め、「上がる」は下から上へ上がることができる物理的特性を持つ場所であることを求める動詞であるとしている。一方で付加的条件を名詞に対して求めない移動動詞は「行く、来る、着く、戻る、寄る、向かう」であるとしている。しかし、例えば、「帰る」と「戻る」の違いは、必ずしも明らかにされているとは言い難い。付加的条件についてはさらなる精緻化が求められる。

以上の通り、残された課題はあるものの、本論文は、そのデータの量と質、堅実かつ慎重な分析方法、妥当な考察を行っており、得られた知見は、認知科学、日本語学、さらには日本語教育への応用の可能性も持ち合わせた優れた研究である。

2 最終試験

平成30年1月22日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(学術)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。